

翻刻『清音集』

要 木 純 一

はじめに

明治十年代の出雲漢詩壇において、重要な文化史的事件の一つとして、幕末明治に活躍した、漢詩人岡本黄石の半年に及ぶ島根県滞在とその間の出雲漢詩人たちとの交流がある。岡本黄石の事績については、近藤春雄著『日本漢文学大事典』(一九八五 明治書院発行) 九一頁の記述を引く。

おかもとこうせき【一八一―一八九八】江戸末・明治時代、近江(滋賀県)彦根の人。漢詩人。名は宣廸。字は吉甫。通称は半助(半介)。号は黄石。彦根藩老宇津木久純の第四子で、十二歳のとき藩老岡本業常の養子となった。天保七年(一八三六)中老となって江戸に祇役し、嘉永五年(一八五二)家老職に陞った。藩主井伊直弼が凶刃に斃れた後は、よく幼主を輔けて事を誤らなかつた。初め詩を中島棕隠に学び、のち梁川星巖・菊池五山・大窪詩仏・頼山陽にも学び、また経を安積良斎に学んだ。詩に長じて唐の杜甫を宗とし、また白楽天を学んだ。明治四年京都に居を定めたが、のち東京に移り、麴坊吟社を創立した。文化八年十一月二十一日生、明治三十一年四月二十日没、年八十八。著に黄石齋詩集六集十二卷・黄石遺稿・東瀛詩選がある。(近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・近江人物志)

幕末までは政治家として活躍し、維新後引退、詩作に没頭して、後進を指導した人である。その『黄石齋詩集』をくれば、日本各地を遍歴し、土地土地の詩人と交流を深めていたことがわかる。明治十五年(一八八二)十二月より、

十六年（一八八三）六月、彼は島根県に長期滞在した。京都を出発して、まず松江に宿し、それから数ヶ月、奥出雲飯石郡の田部家に身を寄せ、再び松江に帰って、短い滞在の後、京都に向かった。（参考資料を見よ）

この間の出雲漢詩人との交流の記録が、『清音集』である。国会図書館に所蔵されているが、長らく存在が忘れられているのを惜しみ、ここに翻刻を試みることにした。幕末から明治初期にかけての、出雲文化史の空白を少しでも埋められたら幸いである。

『清音集』翻刻

この本の、国会図書館における書誌情報を節録すれば、以下の通り。

原本代替請求記号 YDM98831（マイクロフィツシュ）／タイトル 明治新選清音集／責任表示 槇説山（大蘆利七）編／出版地 松江／出版者 一年舎 イチネンシヤ／出版年 明17.7／形態 10J.22cm／装丁 和装／全国書誌番号 41014267／個人著者標目 槇説山 ≪マキセツザン／NDC (6) 919／本文の言語コード jpn:日本語／書誌ID 00000516346

内容を正確に伝えることに重きをおき、字の配置や大きさなどのレイアウトは、原典を再現することに意を注がなかった。たとえば、作者名の下の小字割注を本文と同ポイント、同行にした。傍点は、評の内容にかかわるのできるだけ原文通り振ったが、印刷のかすれ等で明らかに欠けていると判断したものは、特に断りなく補った。原文では、「ㄱ」、「ㄷ」、「ㄹ」字の区別等明確ではないが、文脈により適宜正字に改めた。便利のために、作品に連番をアラビア数字で振った。漢字の表記は常用漢字体を基本としたが、一部、要木の趣味により、旧体字のままにしているところがある。【】内に要木の説明や校訂を加えた。

【表紙・題簽】

明治新選 清音集 完

【表紙裏】

黄石岡本先生題字

松塘鱸先生序文

明治新選 清音集 完

松江 一年舎上梓

【見開き】

【大?】 【篆刻・第二字不明】

山水有清音 【大字・篆書】

癸未二月

黄石岡本迪

【篆刻】
黄石髯叟

【篆刻】
迪吉甫

【序】

翻刻『清音集』

清音集序

今茲癸未夏、余遊雲之松江、借湖上一亭而寓焉。俯飲湖綠、仰餐山翠。既而嘆曰、如此勝槩、豈無一人善詩者乎。適聞黃石岡本翁亦來遊雲中。一日邂逅于沙島雲帆樓。叙久闊之外、翁曰、余以客歲十二月入于此州。已閱半年。今將東歸轅焉。松江子弟、從余問詩者、蓋若干人。近日諸子將各□其詩、梓以頌同好矣。余因名曰、清音集。蓋取諸左太冲招隱詩也。子為我序之。余受說畢、乃擊節曰、有是哉、諸子之善詩也。蓋諸子之受詩於翁者、為日尚淺、而多有可觀者。是其雖由翁指授之有法与諸子才學之有素、而其清調遠音、豈亦所謂得江山之助者非耶。雖然、進銳者退速、諸子繼之、孜孜莫怠、則其進境蓋有未可測者矣。他日翁東歸後、諸子更以一集三集寄送于翁、則翁亦將有擊節賞嘆不曷者是余之所以樂而叙之并勗勉諸子也。

癸未孟秋於雲南飯石山中

松塘鱸彥之識

【原文に句読点なし。□字不鮮明。左太冲は左太冲に作るべし。曷は歌に作るべし】

【例言】

例言

一岡本黃石翁之游松江也。淹留半年。同社諸子及諸家寄贈之詩蓋不為不多。今編之一書。以頌同好。欲省謄写之勞也。

一評語係黃石翁一筆。故其名一一不署。以從簡便。

一同社諸子詩。一以年齒為序次。諸家寄贈詩。亦槩依此例。非敢判優劣也。看者諒焉。

明治癸未十二月南至之日

編者識

【篆刻大字】

丘壑独存

【本文】
清音集

檣說山 編輯

1 次谷鉄臣送余遊山陰韻兼寄示諸同人 黃石鬢叟 岡本
斷梗浮萍未了緣。殘軀七十及三年。于今到处徒揮筆。自古閑文不值錢。海
駒霜寒清曉路。山村午暖小春天。此行何物
充歸遺。欲博新詩玉幾篇。

2 松江雜詩

旧邦形勢冠山陰。最勝名区景象森。市陌縱橫垂都府。城樓突兀俯湖濔。
幽絕處。便同坡老滯留心。初來客愛風光美。久住人誇海味深。応似武昌

3 松江寓居

白頭千里遠遊人。探勝不期留幾旬。誰為江山增潤色。欲將詩賦動陽春。
日仍日。碧翁令我惱吟身。魚龍寂寞巖冬際。巖岳蒼茫乱雪辰。湖鏡難開

4 其二

積水縮來通市闌。長橋分郡架其間。漁人網罟時群集。賈客帆檣日往還。
今誰主。万頃烟波在故闌。難得百年常逸樂。惡能随处占清閑。一竿風月

5 其三 一日開詩筵座上賦似諸子

萍蹤暫寄水雲寰。但怯寒威養病孱。不有群英來侑酒。爭教老子忽開顏。
能看取。風光總在晚晴間。層巒疊嶂當欄出。雪鷺銀鷗逐浪閑。說与汝曹

6 湯村雜詩

桃杏纔開暖意勻。風光便覺適吟身。洛陽花事已過了。四月深山始見春。

7 題三光石 為新田氏囑

金鳥飛其表。玉兔走其裏。星宿列其間。三光兆祥祉。其色赭而黃。其形具山水。其質堅而美。石僅不盈咫。南朝節鉞臣。即是新田氏。兵馬倥傯間。一張仍一弛。豈其無風流。玩物其一耳。此物公遺愛。奚圖今見此。子孫能護之。乃祖神靈矣。今日存華堂。昔時在軍壘。公倒長鯨日。不知何處徙。或應發三光。輝映帳中几。肅然宜拜觀。豈啻丈人比。長留天地中。一塊鍾衆美。

8 松江客次邂逅黃石翁

松塘釣史 鱸

客裏相逢且解顏。孤舟繫在水煙間。明朝橋上應分手。暫上湖樓共見山。

9 遊神龜峽

一峯未了一峯迎。舟向橫披畫裏行。二十里中無笨筆。始知描写化工精。

10 其二

舟行層翠積嵐中。一曲將窮一曲通。作意天公翻旧案。群峯磨劍倒排空。

11 其三

絕無路處有人家。老樹根邊繫短槎。不識溪漁何所獲。夕陽晒罟竹籬笆。

12 其四

行看夾岸万芙蓉。翠壁一重深一重。上尽清溪三百曲。倚天石筍放連峯。

13 從飯石郡重抵松江舟中作

停橈湖上麦秋初。更向山中待暑除。今雨西風吹袂冷。一蓑來釣我家魚。

14 松江客中送黃石翁東歸

白首憐君席未安。暑天行路更應難。預期歸日相逢處。秋雨芝山紅葉寒。

15 奉送黃石老先生遊山陰

如意山人 谷

秋雨芝山紅葉寒。

如君矍鑠世希匹。過了七旬猶壯年。落落未占終老地。栖栖去覓未完錢。雪花席落陰山路。浪沫雨飛鵬海天。可見斯遊奇絕冠。歸來刮目錦囊篇。

16 寄懷黃石老先生在雲州疊韻

欲了平生翰墨緣。東西為客已連年。學徒到处問奇字。臬宰有時分酒錢。絕勝雲山恣遊目。無心野鶴捩何天。親朋日遲歸鄉日。屢寄空中書幾篇。

評 已有問奇字人。未遇分酒錢宰。○頸聯妙甚矣

17 誦高青邱梅花詩 伊豫 逐浪富永 茂

万物之先感一陽。纔從雪裡漏春光。閑雲澹月伝消息。剩水殘山好遞藏。屈子品題何缺乏。逋仙詩句恐尋常。若微知己青邱子。百世誰流翰墨場。

評 善摸梅花之神。空庵子亦梅花知己。

18 新春書懷

少小迎春喜欲顛。老來偏恐歲時遷。經營每自甘牛後。迂拙從他占局先。適意庶無如月下。歡心何有勝花前。須追時節縱行樂。人世終難到百年。

評 每甘牛後之人。時或占局先者也。

19 蛛網

滿腹經綸何太巧。縱橫織出細於紗。春風旦暮檐前樹。綴得文章網落花。

評 巧思密於蛛網。

20 春郊散策 駿河 星秋吉岡 弘

和風春社後。輕靄雨餘村。日麗鶯聲滑。江晴水氣溫。行無無草路。叩有有花門。最喜旗亭近。先來買一樽。

評 頷聯放翁。頸聯方里。

21 春曉

殘月如煙在碧紗。宿醒纔醒便呼茶。吟心忽被鶯聲誘。欲訪前宵入夢花。

評 好意興。

22 奉呈黃石先生次谷鉄臣翁送別詩韻

出雲 淞雨松田 敏

文壇樹旆獨專權。儒雅風流五十年。万首詠成渾鏤玉。寸緘爭購孰論錢。忽拋洛下煙霞地。暫占山陰雪月天。遺憾今亡戴安道。向何人欲示新篇。 先生知雨森老雨。而老雨以客年九月没。句中故及之。

評 雖無戴安道。賴有兄曹。老夫無復遺憾。

23 誦高青邱梅花詩

先生詩格本超然。此什尤知万口伝。疎影暗香雖可誦。美人高士更堪憐。千秋價貴崑崙玉。一脈神完姑射仙。恰比佳花立荆棘。騷壇当日孰駢肩。

評 青邱有明三百年大家。豈唯当日無駢肩。

24 和田容齋令郎誕辰見招。賦此以祝。令郎名曰成曹。余所命也。

吾為君父執。囑吾命君名。爾來三經歲。啼笑見君情。過門誰題鳳。麟趾期餘榮。已有吞牛氣。行心見器成。長松樹下清風足。謾謾聞得振家聲。

評 吞牛已下大有氣力。

25 壬午歲晚書懷

出雲 半村飯嶋興基

為吏十年弄簿書。其如未与世塵疎。一貧依旧歲將暮。五口容身三尺廬。

評 与老杜吏情更覺滄州遠。一般之情。

26 春曉
殘月在梅梢。曉烟輕罩野。栖禽夢未醒。人立香風下。

評 清絕。

27 春月

隔、水、遠、鐘、疎。月、痕、映、簾、額。淡、烟、輕、罩、林。梅、影、模糊、白。

評 春月朦朧。梅花模糊。疎鐘渡水。何限之景。風神亦超絕。

28 客歲十二月。黃石先生來遊我鄉。時余罹病。不能迎候。今將東歸。初得謁見。喜呈一律。兼以奉送。

出雲 春帆三木 敬

天、涯、幾、歲、仰、仙、才。傳、世、文、章、衆、所、推。起、我、宿、痾、愁、枕、臥。逢、君、遠、別、祖、筵、開。舟、船、明、日、雲、千、里。燈、火、今、宵、酒、一、杯。只、惜、匆、匆、分、手、去。青、山、空、剩、杜、鵑、哀。

評 傑作。能得唐人之法。

29 次某子見寄韻以酬

客、舍、連、宵、夢、寐、勞。孤、懷、無、復、少、年、豪。曉、來、殘、雨、纔、晴、處。裂、帛、啼、鵑、掠、月、高。

30 雨中海棠

莫、作、群、芳、一、樣、看。半、開、時、節、露、闌、干。阿、嬌、鎖、在、東、風、裏。滿、袖、灑、來、紅、雨、寒。

31 秋夜宿解脫教精舍 出雲 靜江佐藤 文

落、葉、紛、紛、月、軫、廊。仏、前、空、寂、夜、將、央。早、寒、半、夜、無、由、敵。欲、乞、一、杯、般、若、湯。

評 一杯般若湯。応勝金茎露。

32 采真園觀牡丹

魏、紫、姚、黃、別、樣、粧。花、中、何、物、獨、稱、王。可、觀、濃、艷、動、唐、代。國、色、加、之、天、与、香。

評 花開時節動京城。亦此意。

33 將上京登松江

江、天、近、晚、上、初、程。落、月、含、霜、秋、水、清。一、笑、情、思、反、張、翰。蓴、鱸、時、節、向、京、城。

評 音吐晚唐。

34 次黃石老先生和谷如意翁送別詩之韵奉贈

石見 硯山吉田久胤

好愛烟霞是宿緣。優遊到處送殘年。當時功業傳千載。今日文章值萬錢。縹渺波輝碧湖月。沱寥雪白大天仙。斯行方識多佳句。先見珠璣第一篇。

評 未得驪龍領下之珠。

35 松江秋望

雲烟漠漠望寥寥。衰柳敗荷秋色遙。斷續絃歌隔河岸。依稀城閣漾江潮。角磬嶽宛芙蓉嶽。分郡橋如西國橋。遶郭青山半紅葉。鱸肥時節雨蕭蕭。

評 松江真景如觀。

36 新春書懷

多病何堪落世塵。連年又作客游人。幸逢四海一家日。徒逐碧梅青柳春。邪說行如寒氣緊。斯文起似惠風新。微躬豈敢要安逸。只願陽和及兆民。

評 陽和及兆民則堯天舜日。天下萬歲。

37 奉呈黃石先生。次谷鉄臣翁送別先生韻。

出雲 雲滙三嶋 祭

白髮蒼顏意浩然。齡過七十及三年。奇文自足驚千古。玉食何須費萬錢。花月東山春入夢。波濤北海晚衝天。此遊豪快。應無比。豈啻奚囊錦綉篇。

評 穩妥不見步韵之跡。

38 讀高青邱梅花詩

天教大筆擅仙才。富瞻精華見正開。一代詞宗誰敢及。九篇詩句世為魁。山中高士依然臥。竹下佳人髣髴來。掩卷忽疑身是夢。回頭明月照青苔。

評 七律上乘

39 草堂漫興

皚然殘雪映庭除。窗外梅花月上初。領取閑中清一味。橫斜影裏說仙書。

評 与放翁飲水說仙書一般

40 讀高青邱梅花詩

山城 梧南橫山直方

有唐賢哲尽塵埃。後五百年看達材。和靖二篇何足數。青邱九首獨為魁。清香不斷薰書屋。明月依然照石苔。公去花神

成底思。含愁歲歲落還開。

41 早春書懷

雁信無傳歲又過。客中罹病奈愁何。生來所欲在求大。平日為歡能幾多。廿六年間空逝水。三千里外尚隨波。分明昨夜

家山夢。巨椽湖邊着釣蓑。

評 多病壯年之客遊。其懷抱可想。

42 春近

十年辛苦不成家。又在他鄉馬齒加。走食奔衣欲何托。浮萍斷梗似無涯。鷗邊水面猶封凍。雁外山容未曳霞。独有江梅

先春笑。客情聊且免咨嗟。

評 傑作。雜之唐人名家集中恐不易辨。

43 春日偶作

出雲 翠軒森 信

朝日三竿上樹梢。當窓桃李影相交。書童休漫作高誦。燕子一双來在巢。

評 郭頻伽一流之人

44 癸未元旦

瑞靄籠松竹。艷暎昇小軒。新正逢癸未。宿雨洗乾坤。東岸柳開眼。南枝梅返魂。巷深無客到。且自侑芳樽。

評 合作

45 春日江村

溶溶春漲沒平疇。独弄風光去傍江。柔艣痕紅花下水。漁歌聲綠柳邊艫。十分春色裁詩寫。無限愁魔借酒降。斜照前灘

人去尽。窺魚沙鳥影成双。【鱖の字甚だ不鮮明】

評 頷聯画面不及

46 奉呈黄石先生攀如意山人送先生韵

出雲 琴屋村上寿夫

一、抛、韜、略、絕、塵、緣、。便、以、風、流、斷、暮、年、。文、雅、今、親、毛、穎、子、。武、威、曾、跨、鉄、連、錢、。忽、辭、京、洛、小、春、節、。恰、入、松、江、微、雪、天、。何、怪、彭、臆、錦、囊、滿、。山、川、隨、處、有、新、篇、。【断の字甚だ不鮮明】

評 穩貼

47 田園雜興用高青邱韵

城、偏、風、俗、厚、。我、眼、得、常、青、。翁、醉、誇、身、健、。媪、痴、談、仏、靈、。摘、蔬、半、籃、嫩、。割、肉、滿、厨、腥、。最、是、清、時、樂、。無、人、說、独、醒、。

評 頷聯田園真趣

48 春近

正、是、三、冬、欲、尽、時、。牢、晴、連、日、似、春、熙、。凍、消、牆、角、草、魂、活、。暖、入、池、心、鷗、意、知、。苦、雪、情、同、留、俗、客、。迎、陽、心、比、得、新、詩、。昨、來、聞、說、梅、花、好、。去、賽、湖、南、菅、相、祠、。

評 頷聯浙西名家之口吻○魂活意知四字最好

○

49 奉送黄石先生東帰

出雲 晋斎田代 祥

蕪、吟、幾、日、仰、尊、評、。何、料、一、朝、分、手、情、。到、處、先、生、好、詩、本、。滿、山、新、樹、子、規、聲、。

50 奉寄懷黄石先生在松江

美作 不知也馬場毅

伝、食、羨、君、多、妙、縁、。鱸、魚、美、処、送、殘、年、。郷、情、不、動、張、生、膾、。日、興、何、須、在、相、錢、。一、匹、練、分、湖、畔、水、。双、橋、虹、落、鏡、中、天、。对、山、樓、上、吟、眸、好、。白、雪、成、堆、知、幾、篇、。【在は山陰新聞明治十六年二月二十五日号に左に作る。当に依るべし】

評 余此回遊。伝食豪家。故日興不費一錢。奇縁乎妙縁乎。

51 呈黄石岡本先生。時先生挈家游寓于我州。 出雲 蘭窓阪本世敬

欽仰詩宗。豐鑠仙翁。允迪厥德。穆如清風。維水維山。快適自取。云爾誰歟。岡君吉甫。

52 奉呈黃石先生 伯耆 竹園渡邊恭平

一、擲、万、鍾、塵、芥、同。仙、姿、豐、鑠、仰、高、風。圮、橋、納、履、我、何、厭。君、是、今、時、黃、石、公。

評 猶優孟衣冠。若微雪髮霜髯。誰稱黃石公乎。慙甚愧甚。

53 次谷太湖韵呈黃石岡本先生 出雲 耻齋山本 堅【生字不鮮明】

偶、然、執、謁、豈、無、緣。仰、望、高、名、久、有、年。老、去、何、忘、報、國、志。漫、游、未、用、買、山、錢。鶯、歌、蝶、舞、三、春、夢。麥、穗、秧、針、首、夏、天。到、處、唱、酬、詩、幾、卷。人、言、咳、唾、亦、成、篇。

54 秋村夜掃 出雲 容齋和田義雄

殘、蛩、咽、雨、寂、林、叢。墜、葉、秋、寒、四、野、風。知、是、索、綯、人、未、寐。竹、籬、疎、處、漏、燈、紅。

55 松江秋望

晴、沙、十、里、夕、陽、閑。個、個、漁、舟、曝、網、還。兩、岸、蘆、花、飛、似、雪。秋、寒、三、十、六、灣、灣。

56 奉呈黃石岡本先生 出雲 靜心平賀尚信

往、歲、挂、冠、拋、利、名。漫、遊、今、日、役、吟、情。松、江、山、水、得、新、識。京、洛、煙、花、失、旧、盟。書、卷、胸、中、五、車、富。窮、通、身、外、一、毛、輕。漢、廷、心、有、蒲、輪、召。泰、斗、千、年、仰、老、成。

評 前実後虚之体。七八最過譽。

57 謁黃石岡本先生攀其韵奉呈 美作 大村 章

邈、近、逢、君、亦、宿、緣。老、豪、已、過、古、稀、年。文、章、元、不、尋、常、筆。声、價、尤、高、億、万、錢。今、日、鶴、城、留、驥、足。明、朝、鵬、翼、冲、雲、天。奚、童、何、耐、錦、囊、重。到、處、立、成、金、玉、篇。

評 奚囊中瓦礫耳。絕無金玉。

58 全 美作 結城秀伴

別、後、何、忘、吟、酌、緣。豈、因、再、會、在、今、年。妙、詞、驚、見、如、椽、筆。薄、俸、纔、餘、買、酒、錢。仙、鶴、欲、遊、雲、靜、處。老、松、能、耐、歲、寒、天。知、君、日、對

湖山雪。白玉綴成詩百篇。

評 仙鶴雲靜。老松歲寒。湊合甚妙。

清音集 畢

【奥付】

明治十七年六月九日御届

全年七月一日出版 定価八錢五厘

編輯兼出版人 島根県平民

大蘆利七

島根県出雲国意宇郡

魚町百八十四番邸

売弘所【住所・名前の上に大字で右から左へ横書き】

松江白潟本町

園山喜三右衛門

松江白潟天神町

川岡清助

松江末次縁取町

有田伝助

松江白潟天神町

稲吉吉蔵

参考資料

明治十五年に創刊された、山陰新聞（島根大学附属図書館所蔵マイクロフィルム）には、岡本黄石の松江来訪の記事や出雲の漢詩人と唱和した詩、さらにはそれらの詩に対する黄石の評が多数収められている。黄石が松江を離れた後にも、郵便等で添削を仰いだのであろう作品も見える。また、『清音集』の発行者であった一年舎（大蘆利七）の、『黄石齋集』発売、黄石揮毫の請負、『清音集』発行等の広告が掲載されている。以下、筆者が見つけたものを列挙する。詩については、題と作者名のみ示す。『清音集』所載の詩と一致するものは特に指摘した。二、三字の異同があるが、煩を避けて言及しなかった。黄石の批点がある場合はその旨を記す。訓点は省略した。

・明治十五年十二月十四日 雑記

壬午十二月二日奉送黄石老先生遊山陰 谷鉄臣（『清音集』15に同じ）

次谷如意送余遊山陰韻兼寄示諸同人 岡本黄石（1に同じ）

・明治十五年十二月十六日 雑報

○岡本黄石翁 有名なる西京の岡本黄石翁は四五日前来松白潟灘町なる田部の水楼に寓居せられしが三四ヶ月は滞留の見込みなるよし定めて続々揮毫を乞ふ者あるべし

・明治十六年一月六日 雑記

松江 黄石髯叟（2に同じ）

奉呈黄石岡本先生韵 小琴村上寿夫

・明治十六年一月六日等 広告欄

黄石齋詩 岡本黄石翁著 一集 二集 三集 四集

・当今ノ諸大家先生序跋題詞題字

右発売候間諸君子御購求有テ翁ノ高履歴諸体詩格真ノ本色ナルヲ御閱覽セラレヨ且今般翁遊歴ノ途次当松江魚町田部宗三郎方水楼ニ滞在セラル揮毫御乞望アラバ御好ミノ原紙御持込ニ任セ潤筆料は廉直ヲ以テ弊舎ニテ取次可仕候也【以下他書広告。略す】

明治十五年十二月 出雲国松江天神前 取次売捌本店 一年舎

・明治十六年一月十二日 雜記（末尾に以上黄石先生批点とあり）

松江客舎歳晚偶感 硯山吉田久胤

同癸未歳旦

来呈黄石岡本先生 平賀卯之助（56に同じ）

・明治十六年一月二十六日 雜記（末尾に以上黄石先生批点とあり）

左記之数詩、係美作津山之人不知姣齋馬場毅翁之所作：【中略】…去暮黄石岡本先生遊来于当地、而被寄小稿

一卷、因拔粹稿中之数詩、以供湖江諸彦之一覽、 編者識

出郷作【全二首】

寓居雜詠

奉呈黄石先生次谷鉄臣翁送先生韵 淞雨松田敏（22に同じ）

黄石先生有次谷鉄臣翁送別之韵高作諸子争和之祭亦効顰賦以奉呈 睡雨三島祭

・明治十六年二月二十一日 雜記（末尾に以上二首黄石先生批点とあり）

癸未一月十四日松江寓楼小集得刪韵賦視諸子 黄石髯叟（5に同じ）

早春即興 松田淞雨

奉呈黄石先生攀其次如意山人送別韵高作瑤礎 村上寿夫（46に同じ）

・明治十六年二月二十五日 雜記（末尾に以上黃石先生批点とあり）

謁黃石岡本先生举其韵奉呈 作州 大村章（57に同じ）

全 作州 結城秀伴（58に同じ）

奉寄懷黃石先生在松江 作州 馬場毅（50に同じ）

・明治十六年四月二十日 雜記

奉呈黃石先生 渡邊竹園（52に同じ）

・明治十六年六月二十一日等 広告欄

黃石齋詩集 初集二冊定価金三十八錢／二集二冊 同三十八錢／三集二冊同 三十五錢／四集二冊同 五十錢
并揮毫

右先生本月当松江ニ帰宿セラレ近急發途ノ都合ニ付更ニ詩集并揮毫御望ノ諸君工此段広告ニ及候也

明治十六年六月 松江天神前書肆 取次所 一年舎

・明治一六年六月二十七日 雜報

○送迎書画會 預て当地に滞留の岡本黃石翁の東帰を送り鱸松塘翁の來遊を迎ふるが為め去る廿四日白濁鳴玉樓に於て書画揮毫の雅筵あり席上諸大家の名幅及よび鱸翁の岡翁を送らるゝの詩を懸け花瓶は柘榴を挿みたり來會の人々は郡長県官豪家詩人墨客凡そ四十五名の多きに昇はれり午後一時頃より囲碁者茗且つ分韻の催ほしあり五時過る頃より酒宴を開らき千杯散飛興到るに及びて松塘黃石兩翁各々腕を振ふて揮毫あり続いて天野漱石小豆沢碧湖又黃石翁夫人錦織竹香女史等其他諸子の揮毫あり了りて絃歌の一席に興を添へられたり弊社門田正経も招待に依て參合せしが各歎を尽して解散せられしは黃昏頃ろなりし

・明治十六年七月三日 雜記

癸未六月念七日諸士要余泛舟於松江口号 黃石

同諸同子要黃石松塘兩先生泛舟於湖上黃石先生詩先成余亦攀芳韵賦一首 淞雨（黃石の評あり）

- ・明治十六年七月五日 雜記（黃石の評あり。作者名は直前の詩題の下にあり）
- 客歳十二月黃石先生來遊我郷時余罹病不能迎候今將東歸初得謁見喜呈一律兼以奉送 春帆三木敬（28に同じ）
- ・明治十六年七月十一日（作者名は直前の詩題の下にあり）
拙詩一章。呈黃石岡本先生。 鱸香
- ・明治十六年九月十一日（末尾に黃石先生点刪とあり）
黃石岡本先生東歸後賦三首【二首のみ録す】 松江 木佐与三郎
- 全【二首】
- 全【一首】
- ・明治十六年十月十九日（各首に黃石の評あり）
題画 出雲坂田 春莊閑人 神沢
全
- 看訪君梅花
- ・明治十六年十月二十五日（末尾に右黃石先生批点とあり）
溪村夜歸 出雲坂田人 神沢春莊
江村即事
全
- ・明治十六年十一月四日（各首黃石の評あり）
秋日松江雜詠 硯山吉田久胤（35に同じ）
又
- ・明治十七年七月二十二日等 広告欄
黃石岡本先生題字 松塘鱸先生序文

明治選新 清音集 全 定価八錢五厘【選新は新選の誤り】

此集や岡本黄石翁我カ山陰ニ遊歴中ノ作詩且該氏社中諸氏及ヒ有縁ノ諸家遊覽寄呈ノ詩ヲ編入セシモノニシテ詩家ノ座右參観ニ備ヒ置クヘキ好珍本也諸書店工差出置候間御最寄ニテ御購求奉願候也

明治十七年 七月 松江天神前書肆 一年舎

岡本黄石の別集、『黄石齋第五集』（明治十八年三月十二日出版御届・昭和六十三年十二月汲古書院発行『詩集 日

本漢詩』第十八卷所収）の巻五に山陰遊歴の際の詩作が収められている。今、詩題のみ列記する。

次韵谷如意送余游山陰詩兼寄伊勢小湊頼支峯神山鳳陽江馬天江（1に同じ）

風雪四十八曲嶺

松江（2に同じ）

松江寓居雜詩六首（第一首は3、第五首は4、第六首は5に同じ）

二月廿二日自松江到飯石路上作

宿粟谷

飯石郡田部氏招迎賦此以贈

題田部氏祥靄山房

贈田部氏家宰山根某

題桜井氏清聽軒

題三光石新田氏囑（7に同じ）

追悼田芹坡

発湯村口占

山本氏双松

翻刻『清音集』

訪山本惺室

五月十七日山本方来同恥齋要余及諸游好泛舟於神西湖永井香圃作其図余詩以記之

飯冢氏遠眺樓

鱸松塘見訪寓樓有詩次其韵

島根県漢詩人の別集に、黄石との唱和次韻の詩が多く収められている。以下偶々管見に及んだもの。

・若槻敬（若槻礼次郎の義父）『槻陰詩集』（明治三十六年二月六日・若槻礼次郎発行）

明治十六年六月廿四日侍飲黄石岡本翁松塘鱸先生於鳴玉樓席上分韵

・村上寿夫『琴屋詩存』（昭和十三年三月二十五日・村上巖男発行）卷下 七言律

送黄石先生東帰

本翻刻は、

山陰研究センター 山陰研究プロジェクト

1003 要木 純一 山陰地域文学・歴史関係資料の研究 実施年度：2010～2012年度

による研究成果の一部である。国会図書館のご協力に感謝申し上げます。